
蟬

平杏維新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝉

【Nコード】

N3847S

【作者名】

平杏維新

【あらすじ】

これはとある少女と俺の物語。彼女は蝉を羨み、蝉になることを願っていた。

（前書き）

これは2年前私が初めて書いた短編小説です。

周りの方々を見ているとこれは長いんじゃないかなんて思いました

たが
悪魔で短編小説で書いたので、連載するのは内容的な切れ目が難しい
と思います

結構長いですが短編小説として書かせていただきました。

分類的には恋愛小説かホラーかよくわかりません。

友人にはホラーといわれました。

とりあえず拙い作品ですが見て下さい。

いきなりだが、学区というものを知っているだろうか。

まあ、やはり「学区なんて知らない」という人はいないだろう。

小学校でも中学校でも学区は制定されていて、誰もが知っているはずだろう。

では「学区の隅の辛さ」をわかる人がいるのだろうか。たぶん、それは少ないと思われる。

俺は幼稚園から中学までずっと学区の隅だった。

しかも学区が異様に広く、遠くから学校に通うのはとても辛かった。車で送ってもらおうという手があったが、女手一つで俺を育ててくれる母にそんなことは頼めなかった。

そうは言ってもやはり遠いものは遠い。学校に行く前にバテてしまいそうだった。

実際、何度も学校へ行く事を断念しそうになった。ってか断念した。まあ、でもすぐに俺はこの地獄もまんざら悪いわけでもないと感じる事になるんだがな。

あれは小学校二年生の六月、ちょうど梅雨の時期の真っ只中だった。

俺は通学路の中の雑木林をゆっくりと歩いていた。

「学校に行きたくない」とか「学校に行くのが面倒」だとか思ってたんだろう。足取りがいつもに比べてやけに重かった。

さらに俺の気持ちを表すように暗い林の中、しとしとと雨が降っていた。

傘を差しながら、歩いてると周りが見えなくなる。後ろなんて本当に心配すら感じない。

だからだろうか。この雨の中、聞こえるのは自分の足音と雨が葉に

染みる音だけだった。

いつもは林を途中で抜けて、大きな道路まで歩いていくはずだった。

しかし、今日は本来、大通りを無視して真っ直ぐと林の奥に進んでいった。

「学校に行きたくない」という思いが高まって、遠回りして学校を遅刻していくつもりだった。

学校の方にも通学の事情は伝わっていてある程度の遅刻なら許されていた。

真っ直ぐ荒れた道を進んでいくと、林の中には神社があった。

神社と言っても本当に小さな神社で、入り口にある鳥居もちんけな物だった。

本堂は暗く、ボロボロに腐敗していてなんか気味が悪かった。

真ん中には大きな木が一本立っていてその葉や枝は全く手入れされていなかった。

それが余計にその気味の悪さを生み出していた。

「この神社、気持ち悪い…、お化け屋敷みたいだ…。」

「失礼な、どこがお化け屋敷だ。」

「うわっ！」

後ろから女の子の怒声が聞こえてきた。

つい驚いてしりもちをついてしまった。濡れた土の上に座ってしまって、ズボンに泥でグシャグシャになってしまった。

尻に不快な感覚を覚えながらも、後ろを振り向くと同年代ぐらいの女の子が立っていた。

身長は小柄でやせていた。でも、顔立ちは整っていて日本人形のよくな美しさがあった。

俺の心臓はドクドクと音を鳴らしていて、顔は火照っていた。なん

だこの感情は……。いや、これは間違いない。

「お化けだ……。お化けが出たぞ……。」

恐怖だ。この女の子は間違いなくお化けだ。最近読んだ本の中に美人の女の子がお化けとして出てきて人を殺すという話があった。確実にその話と一緒にだ。

「違うわよ……。」

女の子はどこか冷めたような顔つきをしながら言った。でも、俺はまだ信じる事ができなかった。
今から殺す人に自分から「お化けです。」なんて言うわけがない。

「悪霊退散！消えろ！亡霊！」

俺は神社に居る巫女さんのように女の子の前で大きく手を振った。

そうすると女の子は眉間にしわを寄せているのが見えた。

やはりは幽霊にはこれは効くようだ。そう思っていると女の子は拳を握りながら口を開いた。

「だから、違うって言っているでしょう！！」

そして、その拳を俺の鼻にめり込ませた。俺は鼻に痛みを感じながら後ろに吹っ飛んだ。

訂正。女の子はお化けじゃなかった。ただの殺人鬼だった。

その後、その女の子とたくさん話をした。俺が質問をすると、彼女は笑いながら答えてくれた。

どうやらそこのお化けや……神社の娘らしい。お化けではなくて少し

安心した。ただの暴力的な少女だ。

同じ学校らしいのだが俺は会ったことがなかった。というよりも俺自身が顔を覚えていないという可能性が高い。

彼女は自称「病弱」で学校を二週間も休んでいたらしい。今日も休むつもりだったらしく、彼女は私服だった。

あんなに強いパンチを放てるのにね、どこが病弱なんだろうね。

「どうして、急に僕に声をかけたんだい？」

と尋ねると彼女はちよつと悩んだような顔をして、思い出したように答えた。

「暇だったからよ。ここに来る人も少ないし。」

どうやらこの神社に来る人はとても少ないらしい。というよりもまずこの雑木林に入っていく人自体少ないらしい。

さらに彼女は学校に行っている日数が少ないので友達が少ない。

彼女と会う人なんて数えられる程しかない。

彼女の知り合いや親友というのは数えられる程しかないのだ。

その事実は何故か、俺はセンチメンタルな気持ちになってしまった。小さな頃の俺の心は今と違って美しく、繊細なものだった。だから言ってしまった。

「じゃあ、僕が毎朝ここにきてあげるよ。」

鼻血を出しながら僕はカッコよく言ってやった。

というわけで毎朝、彼女を迎えに行くことになった。

しかし、そのうちこの習慣も面倒になってくる。

でも、女子と登校するという事実は俺の毎朝の地獄を少しは中和し

てくれた。

そして、少なからず俺は彼女に好意があったのかもしれない。

そう考えると今では凄く良かったことだと思われる。

さて、ここまでが彼女との出会いの話だ。そして、数年の時が経った。

いつも通り、彼女を迎えに行くために授業開始時間の四時間前に起床した。

毎朝の通り、窓から見える外の景色は暗くどこか物寂しさを感じさせた。

台所にあった濡れたコップをとり、蛇口をひねり水を飲んだ。

俺の頭はまだボーっとしてたが机の上にある紙幣を取り、制服に着替えた。

アホ毛がぴょんと立っていたのだがまたこれもいつもの通りで直らないのはわかっていた。

彼女の家に行くと彼女はいつもの通りに笑顔で大木の前に立っていた。

彼女の笑顔はまるで天使のようで…ということは別にないが、女性の笑顔は無条件で美しい。

だから彼女のいつもの笑顔は俺の疲弊した身体や心を癒してくれた。今日は少し遅れてしまったのだがあの笑顔なら大丈夫だろう。

「五分遅刻だぞお。」ぐらいで許してくれるだろう。全く俺も幸せものだ。

そう考えて近くに行くと彼女は笑顔を崩さないまま、こう言った。

「五分遅刻。遅すぎる。散れ。」

まあ…現実はそんなに甘くないよな。でも、この時間でも通常登校時間よりも三十分は前に着くはずだけどな…。

あれから数年、彼女は成長した。身長はもちろんだが、性格の刺々しいところまで成長してしまった。

そして、今の通りに笑顔で暴言を吐けるようになってしまった。ああ、環境っていうのは恐ろしいものだ。

そう実感していると後ろから蹴られた。彼女はエスパーか。

ただ、病弱なところは変わらなく、欠席日数一ヶ月・・・ということはないが、結構な頻度で休んでいた。

彼女はその病気については何も語らなかったが、長引いている病気ということとは結構重い病気なのだろう。

そんな事を考えながら、彼女を自転車の後ろに乗せて学校へ向かった。

いつもの通り、学校が終わった。部活はもちろん入っていない。

部活なんて入ってしまうと何時に帰れるかわかったもんじやない。

補導される時間になってしまう。

帰日も彼女と一緒に帰るかというのと、そういうわけではない。

彼女はそのまま車に乗って、大きな病院にいつてしまうからだ。よくわからないが彼女の病気の検査か何かをするらしい。

本当に重い病気なのだとその時は他人事のように思っていた。

彼女を見ると、無表情で車に乗っていく様子が見えた。いつも笑顔の彼女にしては無表情は珍しかった。

まあ、病院に行くのが楽しいって輩は恐らく居ないであろう。

そう思って、自転車の鍵を外した。少し寂しいような苦しいようななんとも言いづらい背中で俺は帰路につく。

それが俺のいつもどおりだった。

あれは蝉の鳴き始めたころだった。

その日は目覚まし時計が効かずにいつもより一時間遅く起床してしまった。

空はもう白んでおり、俺は水を飲む時間もなく制服にすぐに着替え

て出て行った。

彼女には「一時間ほど遅れそう。先に行つてて」という旨のメールを送った。

冷めた風の中、俺は自転車のペダルを強く踏み込んだ。

学校に着くと、遅刻ぎりぎりで着いた。騒がしい朝の喧騒の中、俺は教室まで走った。

俺はふと教室を見回すと彼女の席は空席だった。

彼女の席の横にも荷物はかかっておらずどうやらまだ学校には来ていないようだった。

彼女はもしかしてメールを見ずにまだ待っているんじゃないのかという一抹の不安があった。

しかし、彼女はしょっちゅう休むのでその不安も授業が始まるくらいにはその不安もとつくに消えていた。

次の日もその次の日も彼女は朝、いつもの大木の前には立っていなかった。

俺はこの長期の休みに不安を抱えていた。

この長期休暇、彼女の病院に行くときの表情：もしかしたら病気が悪化して大変な事になってしまったのか、などと考えてしまう。

その不安が胸をうずかせながら一週間がたった。

彼女が来たのは休み始めてから一週間後の二時限目が終了した辺りだった。彼女はいつもの通りの笑顔を浮かべて、教室に入ってきた。

「長期の間、休んで申し訳ございませんでした。」

と彼女は皆と先生に頭を下げながら謝っていた。そして、彼女は変わらぬ笑顔のまま、自分の席に戻っていった。

俺は病気が悪化したわけではなかったので安堵の気持ちでいっぱいだった。

不意に休んでいる間たまっていたプリントを整理している彼女の表情を見るとやっぱり笑顔だった。

その表情を見るとただの笑顔には見えなかった。ボーっと見ていると、ニヤニヤした顔で隣の男子が俺に話しかけてきた。

「お前の見蕩れる気持ちもわかる！あの子はいつも笑顔で綺麗だからな。」

「別に見蕩れてなんかねえよ。」

全くこいつは……。でも、やっぱり俺はその笑顔はいつも通りのそれには見えず、どこか苦しさや悲しさという哀愁を含んでいるように見えた。

その日の放課後は体育館で集会が行われた。夏に入ってたでさえ暑いのに、人が密集して余計に暑い。

さびた鉄製ドアが開けっ放しになっているが中に入ってくるのは風ではなく、蝉の声だけだった。

グダグダ長いことに定評のある校長の話は本当に長かった。暑さと退屈さで体育館内ではたくさんの死者が生まれていた。

うちのクラスも壊滅的でクラスの半分以上が戦死していた。俺も戦死にかけている一人で、どうにか死なないように眼を開けているが戦死するのは時間の問題だった。

重い瞼を閉じないためにもどうにか生存者を探して、そいつと話して気を紛らわすという方法を考えた。

しかし、周りを見回しても屍の山しかなかった。だが、すぐ近くに

俺と同じように死にかけている彼女を見つけることができた。

そのまま座りながら彼女のもとに移動すると彼女はあからさまに嫌な顔をしてきた。やめてくれ、本当に傷つく。

「よう、今日元気ないな、どうした？」

彼女は少し間を置き、ムスツとした顔で答えた。

「病み上がりの人に元気を求めてどうするのよ。」
「そりゃそうだ。」

はい、これで会話終了。…まずい、眠くなってきた。

俺の意思に反して降下してくる臉を防ぐため、真っ直ぐに校長の話を聞いている彼女に話しかけた。

たわいもない話をするが彼女は「そう。」とか「へえ。」としか返してこなかった。

もうちょつと言葉のキャッチボールをしようぜ…。そう思いながらまたたわいもない話を投げかけた。

「それにしても暑いな。やっぱり蝉のせいかな？」

と話しかけると彼女は珍しくこつちを振り向いて答えた。

「蝉のせい？それはどういうことよ？」

俺は腕を組みながら、少し偉そうにしゃべった。

「いやあ、だってさ蝉の音って聞くだけで暑くないか？ほら、よく風鈴は涼しい音がするとかいじゃないか。」

それに対して蝉の鳴き声っていうのは夏の風物詩だけあって、暑い

感じがするじゃないか。

本当に蟬って迷惑だよな。たった七日間しか地上に出れないのならもうちょっと利口に生きろよな。そもそも蟬っていうのは…」

と調子に乗って話していると急に彼女は立ち上がって、こっちを睨みつけた。

「ふざけんじゃないわよ！あんたは何が言いたいわけ？たった七日間の命しかないのよ？あんたわかつてるの？

それを人間の都合で利口に生きろなんて言われたら蟬もやっていけないわよ。」

と叫ばれた。もちろん会場は静かになった。校長も先生も目を丸くして呆然としていた。

もちろん彼女の周りのクラスメートも俺もだ。

彼女は状況に気づいたらしく顔を真っ赤にしながら「お手洗いに行ってきます。」と言って外へ出て行ってしまった。

彼女はなんであんなに怒ったのだろうか。当時は全くわからなかった。そして、その微妙な空気のまま集会は終わった。集会が終わっても彼女は帰ってこなかった。

放課後、彼女に怒った理由を聞きに行こうと彼女を探したが彼女はもう行ってしまったらしく机にかばんは置いてなかった。

俺はかばんを背負い、自転車置き場まで細い道を上っていった。そうすると校門の所に彼女の車と彼女が見えた。

彼女の表情を見るといつもの笑顔でもなく無表情でもなく…今にも泣きそうな不安な表情で車に乗っていった。

その表情に違和感を覚えながらも、当時はたぶん今日のことがあったから流石の彼女も辛かったんじゃないだろうかなぐらいにしか思っていないかった。

俺は鈍感だ。鈍感すぎる。家に帰ると彼女からメールがあった。内容はただ一言「ごめん」だけだった。いや、謝る必要があるのはこっちだと思いながらもメールが返せなかった。

次の日、いつも通りに彼女は大木の前で立っていた。いつもの笑顔をしながら。でも、昨日よりも悲しみの度合いが高いような気がした。たぶん、気のせいだろ。彼女はこっちまで来るといきなりこう言い出した。

「今日は学校休んで海まで行こう。」

何を言い出すんだ。こいつは。確かにここら辺は海には面していない。実は俺も彼女も海は見たことがない。

なので、見たい気もするが学校を休むのは…。そう言うとな彼女は睨みつけて駄々をこね始めた。

駄々と言えば可愛く聞こえるがほとんど脅しだ。まあ、昨日恥をかかせたのだからしょうがない。

彼女を後ろに任せ、山を下っていった。また自転車で山を下山するのも初めてで、山の冷たい空気が俺に吹き付ける。

そのせいか、俺のテンションを高まらせていた。最高だ。山、最高！

「山は良いなあ！」

つい叫んでしまった。でも、山の中だから誰にも聞こえない。

「死ねばいいのに…。」

後ろに人が一人いた。もう、恥ずかしくて死にたかった。車道に飛び出て轢かれたかった。

そんないつも通りのやり取りを繰り返しながら下山していった。

そして一時間もすると海に到着した。潮風のおいがまたなんとも言えないくらい、気持ちが良い。

海は本当に大きく、広かった。彼女はというと俺が感傷に浸っている間、砂浜まで俺を置いて走っていった。

子供は元気だな。いや、俺も変わらないか。

俺もゆっくりと砂浜まで歩いていくと彼女はクルッとこっちを向いて水をかけてきた。

俺の一張羅の制服がびしょびしょになってしまった。

俺が水をかけ返すと彼女は用意してあったように水着に着替えていた。用意周到すぎて驚いた。

そのまま、二人でグダグダと遊んでいた。楽しい時間は刻一刻と終了のチャイムを鳴らそうとしているのに気づかず……。

学校が終わりそうな時間になると二人は疲れきって浜辺に座っていた。

俺の制服は砂と水だらけで洗濯の必要があった。夕方の海の景色も綺麗で静かに太陽が沈んでいくのが見える。

彼女は携帯でメールを打っていて、ここに聞こえるのは波と蝉の鳴き声だった。今が好機だと思い、俺は口を開いた。

「なんか……昨日はごめんな。お前があんなに蝉好きだとは知らなくてさ。」

俺は言葉のほうが気持ちの重さは伝わると信じている。だから、昨日はメールを返さずにいた。彼女はこっちを向かずに指で下の砂をいじりながら答えた。

「別に良いよ。私も熱くなりすぎた。あと、蝉はそこまで好きじゃないから。」

「好きじゃないのならどうして、あそこまで怒ったんだ？」

素直に疑問を口に出してしまった。この質問をしてよかったのかいまだにわからない。

彼女のことを知らずにすんだのかもしれない。傷つかないですんだのかもしれない。未だにわからないままだ。

彼女は少し困った表情になり、考えてから答えた。

「私は蟬にはなれないからよ。」

必死に短い時間を長く、長く伸ばしてきた。自分では比較的、他人の迷惑にならないように利口に生きてきたつもりよ。でもね。」

彼女は膝に顔をうずめた。彼女の声は涙声だった。

「それでもここで終わりになってしまっただって。」

例え利口に生きてきても、長く生きようとしても所詮この程度しか生きられなかったの。」

ついに彼女はこっちを向いた。だが、涙で美人な顔がぐしゃぐしゃだった。でも、眼はいつもよりも真剣だった。

「もっと、自分という個体を主張していけばよかった。もっと、素直に生きていればよかった。」

もっと、やりたいことをやって生きていればよかった。私はそれができる蟬がうらやましいの。そんな蟬になりたいの。」

彼女はそれを言い終わるとすくっと立ち上がりとりつくろうようにニコツと笑った。

「ごめんなさい、こんな話をしてしまって。全く意味がわからなかったでしょうね。」

確かに俺はその時は意味がわからなかった。情報の連結が全く出来なかった。

ただ、彼女に対する不安と喪失への恐怖が入り混じって魔法をかけられたように茫然としているしかなかった。

「まあ、冗談だと思いなさい。」

彼女はやはりにっこり笑った。でも、冗談には思えない真剣さだった。彼女はそのまま身体についた砂埃を払い、こっちを向いて真剣な表情をした。

「まあ最後に素直にっていうなら…あなたのことが好きでした。以上。」

といって彼女は俺の顔に手をあて、顔を近づけキスをした。これが俺の初めてのキスで彼女との最後の別れだった。彼女は手を振りながら最後に

「人生ってのは案外短いからやりたいことはやるべし。じゃあ、さようなら。」

彼女はそのまま迎えに呼んだ車で帰ってしまった。俺は呆然とするしかなかった。

呆然とするまま家に帰り、呆然とするまま親に怒られた。

なので彼女から「明日から来なくて良いから」という旨のメールが来ているのに気づいたのは寝る前だった。

次の日、学校に行くと先生は彼女は学校を辞めたということをクラスの皆に伝えた。

彼女はクラスでは人気者でクラスメイトは皆：いや、特に男子が落胆していた。

そんな中、俺はまだ彼女の消失を認められなかった。認めたくなかった。

帰りに彼女の家の神社に行くと見知らぬおじさんが出てきた。彼女の父が本来神主さんをやっているはずなのに。

そのおじさんに聞くと、彼女の家族はここをおじさんに引き継いでどっかに引っ越したらしい。

彼女を大型病院に入院させるために。俺はでも諦めがつかなかった。たくさんさんの話を聞いて、調査をしたが彼女の家は近所との繋がりが薄く、全く情報が手に入らなかった。

それでも探し続けたが、俺自身も母の再婚があり、半年後には東京の方に引っ越すことになってしまった。

こうなると全く情報も手に入らなくなり、どうしようもなくなる。おれは断念せざるをえなかった。

あれから十年が経つ。俺は大学を卒業して、ベンチャー企業に乗り出した。

周囲にはものすごく反対はされたが彼女の言うとおり「やりたいことをやる」ということが大切だ。

あれからずっと俺の心から彼女は全く消えなかった。

でも今となってはもう彼女は亡くなっていると思う。

逆に亡くなっていなかったらずっと病院生活で彼女が目指している蝉のような存在にはなれずじまいだ。

蝉の鳴く季節になると俺はこの故郷に戻ってくる。彼女と出会い、別れたこの季節。

そこで、長い通学路を歩いてみる。運動不足になってしまった今となっては当時の自分を称えたいと思うくらいに長い通学路だ。

いまでは道路整備がされていて、この田舎の土地も随分と近代的になった。彼女と通った道も随分変わってしまった。

でも、一つだけ変わらないものといえばあの神社であろう。

あいかわらず暗い雑木林の中を進んでいくと一本の大きなお化けのような木が立っている。

その木には一匹の蟬が止まっていた。その蟬は頑張って腹を震わせて楽しそうに声を出している。

彼女もあんな蟬になれたのか。いや、心配する必要はない。彼女ならあんなったはずだ。そう、信じている。

話は変わるが、それにしても…。やっぱり…。

「この神社気味が悪い…この神社はお化け屋敷みたいだ。」

「失礼な、どこがお化け屋敷だ。」

「うわっ！」

後ろからそんな女性の怒声が聞こえた…。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3847s/>

蝉

2011年10月8日23時04分発行